

よみがえることば—3
夫人は花を買いに—或いは for の変幻

東京大学教授 高橋和久

Virginia Woolf の *Mrs Dalloway* (1925) は一見、唐突に始まる。'Mrs Dalloway said she would buy the flowers herself. / For Lucy had her work cut out for her.' メイドには別に頼んだ仕事があるから、夫人は自分で花を買ってくると言う。おそらく彼女はふと思いついて、'I will buy the flowers myself' と声をかけた。それが最初から予定されていた行動であれば、'I will' とは言わなかっただろう。もちろん花の手配は彼女が前から考えていたこと。だからこそこの 'the flowers' である。この定冠詞に照応する情報はテキスト内にはないから、読者は一瞬戸惑う。さらに Lucy という固有名に何ら説明が与えられない（後に Dalloway 家で働くメイドらしいと判明）のも戸惑いを助長する。叙事詩さながらに、読者はいきなり話の真ん中に放り込まれる (*in medias res*) のである。*Ulysses* にも似て、いくつもの人生が交錯する 1923 年 6 月のある想像上の水曜日を切り取る作品にふさわしい冒頭と言うべきか。

夫人が自ら出かけるのは朝が爽やかだからでもある。玄関のドアを開けた彼女はそれを実感する。

What a lark! What a plunge! For so it had always seemed to her when, with a little squeak of the hinges, which she could hear now, she had burst open the French windows and plunged at Bourton into the open air.

「飛び込み」を連想させる *plunge* が浮き立つ気分を表すのは印象的であると同時になかなか意味深長だが、これは夫人の娘時代の Bourton での経験（過去完了時制で導入される）に結びついている。そしてまた「楽しさ(lark)」の裏に潜んでいないとも限らない。「ヒバリ」と呼応して、垂直的な上下運動を暗示するかもしれない（実際、垂直・直立のモチーフは幾らか意味ありげにテキスト中で反復される）。蝶番ちょうつがいの軋む音を契機としてプレイバックされた 18 歳だったころの情景を思い浮かべながら、夫人は花を買いにロンドンの街へと足を踏み出した。

歩道の縁石で立ち止まり、少し身を固くした彼女を見て、同じ区域に住む Scrope Purvis は「どこか鳥を思わせる雰囲気がある」と思う。そんな彼の勝手な感想を夫人は知るはずもない——'There

she perched, never seeing him, waiting to cross, very upright.’
—彼女は車の行き過ぎるのを背筋を伸ばして待っているだけなのだが、次のパラグラフはこれを受けるように始まる。

For having lived in Westminster ... one feels even in the midst of the traffic, or waking at night, Clarissa was positive, a particular hush, or solemnity ... before Big Ben strikes.

冒頭の ‘For’ は、以下が前段の理由となっていることを示すだろう。彼女が他人には目もくれず、歩道で身を固くしたのは、ビッグ・ベンが鳴る前に、厳粛な静けさを感じずから、ということになる（実際、この直後にビッグ・ベンが鳴り出す）。しかし奇妙なのは、この理由が話者による直接の解説として提供されるのではなく、途中で挿入される ‘Clarissa was positive’ の支配する現在時制で語られる認識、つまり主人公の確信の内容として提示されていることである。前段が Purvis の視点による記述（‘perch’ の似合うのは鳥だろう）であることを考えれば、Purvis の捉えた現象が Clarissa の意識によって説明されていることになる。どうやらこの話者は様々な人物の意識の内と外を自由に往来できる特権的な地位にいるらしい。実はこの前に現れていたふたつの ‘For’ も日本語に置き換えにくいこの話者の独特の位置取りに影響されている。人々の意識の流れを for を駆使しつつ掬い取ろうとするこの話者に造型されたヒロインは 50 歳を越えたというのに、随分と若々しい。繊細と俗物性が同居する彼女の、つまりはわたしたちの、危険な 1 日はまだ始まったばかりである。

